

AFC U-19 WOMEN'S CHAMPIONSHIP CHINA 2017 TSG 報告

▶大会概要

1. 大会期間 2017年10月15日～28日
2. 開催地 中華人民共和国 江蘇省南京市
3. 試合会場 Jiangning Sports Centre Stadium (江寧体育中心体育场)
Jiangsu Training Base Stadium (江蘇省江寧足球訓練基地)
4. 参加国 前回大会のベスト4と予選を勝ち抜いた4チームの計8チーム
5. 大会方式 グループステージ：各4チームの2グループによる総当たり1回戦
ノックアウトステージ：各グループ上位2チームが進出
準決勝・3位決定戦・決勝を行い、上位3チームが
FIFA U-20 Women's World Cup2018 フランス大会に出場
6. 大会結果

【グループA】

	朝鮮民主主義 人民共和国	中国	ウズベキスタン	タイ	勝点	得点	失点	得失点差	順位
朝鮮民主主義 人民共和国		2 (2-0) 0	2 (1-0) 0	9 (5-0) 0	9	13	0	13	1
中国	0 (0-2) 2		2 (1-0) 0	2 (1-0) 0	6	4	2	2	2
ウズベキスタン	0 (0-1) 2	0 (0-1) 2		2 (1-1) 2	1	2	6	-4	3
タイ	0 (0-5) 9	0 (0-1) 2	2 (1-1) 2		1	2	13	-11	4

【グループB】

	日本	オーストラリア	韓国	ベトナム	勝点	得点	失点	得失点差	順位
日本		5 (0-1) 1	2 (0-0) 0	8 (3-0) 0	9	15	1	14	1
オーストラリア	1 (1-0) 5		2 (0-0) 0	5 (3-0) 2	6	8	7	1	2
韓国	0 (0-0) 2	0 (0-0) 2		5 (2-0) 0	3	5	4	1	3
ベトナム	0 (0-3) 8	2 (0-3) 5	0 (0-2) 5		0	2	18	-16	4

【ノックアウトステージ】

準決勝 朝鮮民主主義人民共和国 vs オーストラリア 3-0(2-0)

日本 vs 中国 5-0(0-0)

3位決定戦 オーストラリア vs 中国 0-3(0-1)

決勝 朝鮮民主主義人民共和国 vs 日本 0-1(0-0)

【大会結果】

優勝 日本

準優勝 朝鮮民主主義人民共和国

第3位 中国

第4位 オーストラリア

*上位3チームがFIFA U-20 Women's World Cup2018 フランス大会への出場権獲得

大会 MVP ⑦SUNG HYANG SIM (朝鮮民主主義人民共和国)

得点王 ⑦SUNG HYANG SIM (朝鮮民主主義人民共和国)

フェアプレー賞 日本

➤分析の観点

本大会は、来年開催されるFIFA U-20 Women's World Cup2018 フランス大会に向けたアジア最終予選と位置づけられる。今回で9回目を迎えたAFC U-19 Women's Championshipに日本は第1回大会から出場、4回優勝しており(AFC U-19 Women's Championship2015 中国大会 MVP:小林里歌子)、FIFA U-20 Women's World Cupには第1回大会から5回出場、FIFA U-20 Women's World Cup2016 パプアニューギニア大会では3位となり(得点王:上野真実、MVP:杉田妃和)、今回のAFC U-19 Women's Championshipにも招集された⑦林穂之香・⑬宮川麻都が出場している。また、今回AFC U-19 Women's Championshipに招集された選手のうち11名がFIFA U-17 Women's World Cup2016 ヨルダン大会に出場(MVP:⑩長野風花)している。

今回のTSGでは、前回大会でノックアウトステージに進出した3チーム(朝鮮民主主義人民共和国・中国・韓国)の現状把握とそれに追従するアジア諸国の取り組みにおける、日本の立ち位置を把握・分析し、そして日本が「世界のなでしこで在るために」日本の特長と課題を明確にし、今後の育成と強化の指針を得る目的で分析を行った。

➤大会の特徴とトレンド(技術戦術的分析)

◎出場国の実力差

今大会は決勝に進出した日本・朝鮮民主主義人民共和国のグループとノックアウトステージに進出した中国・オーストラリアとグループリーグ敗退の韓国のグループ、そして大会出場のウズベキスタン・タイ・ベトナムの3グループに分けることができた。日本・朝鮮民主主義人民共和国のグループでは攻守において関わりを多く持ち、また攻守の切り替えも速く、互いに意図的にテクニカル・スピーディーなプレーをし、特に決勝戦はレベルの高い拮抗したゲームを展開していた。次のグループであるオーストラリアにおいては、中国や韓国より組織的ではないが守備においてはコレクティブにプレーしようという意図が見られ、攻撃においてはゴールキーパー(以下:GKに統一)が積極的に関わりビルドアップをしようとするがテクニックが伴わず、前線にロングボールを入れるシーンが多く見られた。中国や韓国においてもプレッシャーのかかる状況の中でテクニックを発揮することが難しく、決勝に進出した2チームとの差は否めなかった。

◎テクニカルなサッカーを指向

世界のサッカーが「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」（FIFA Women's World Cup2015 カナダ大会 JFATSG 報告より）という流れの中、実力差、体現出来る・出来ないはあるものの、出場したチームのほとんどがテクニカルなサッカーを指向しているように感じた。特に日本・朝鮮民主主義人民共和国においては攻守両面でコレクティブに闘いスピーディーな展開、球際の強さ、そしてその中で判断を伴いながらテクニックの質高く発揮する場面を見せていた。オーストラリアや中国、韓国も同様に、全員がボールに関わりながらゴールを目指し、ボールを失ったら素早い切り替えからボールを奪うというサッカーを指向していた。しかし、プレッシャーのかかる状況下では個のテクニック不足が如実に現れ、判断が悪くボールを失うことが多かった。さらにオーストラリアにおいては GK が積極的に攻撃に関わるものの、互いの距離感が遠く、関わりが困難な状況となり、判断なく相手の DF ライン背後へ蹴り込む場面が多く見られた。タイやウズベキスタンは攻守においてテクニックの質が低かったが、テクニカルに指向しようとする意識は見られた。ただし、上位 2 グループが指向しようとするレベルとは大きな違いがあった。

▶各チームの分析

朝鮮民主主義人民共和国（グループ A : 1 位）

1-4-4-2

怪我で出場不可の選手以外は、全試合固定したメンバーで臨んだ。攻撃時はサイドバックのオーバーラップは時折見せるものの、全体的にポジションチェンジはあまり見られない。

得点王と最優秀選手に輝いた⑦SUNG HYANG SIM の個の能力が突出している。また、⑬JU HYO SIM のサイドチェンジのパスの精度は非常に高く、逆サイドへの展開がスムーズであった。守備面においては全体的に球際も強く、チーム全体の守備意識が非常に強い。攻撃から守備への切り替えも速い。

中国（グループ A : 2 位）

1-4-4-2

攻撃の選手に多少入れ替えは有ったものの、ほぼ固定したメンバーで臨んだ。GK を含んだ DF ラインとボランチで安定したポジションを試みるが、テクニック不足からボールを失う事が多かった。また、アタッキングサードでのテクニックの質も課題となった。連動した意図的なプレーや 3 人目の関わりも少なく、2 人称でのプレーが目立った。守備においては、局面での守備に迫力はあるものの、ボールを意図的に奪う場面は少なかった。

ウズベキスタン（グループ A : 3 位）

1-4-4-2

GK を含んだビルドアップに意図はあるものの、攻守が連動して組織的に関わりながらではなく、個での打開に頼る戦い方であった。北朝鮮戦では、球際へ積極的に関わりながら体を張って粘り強くボールを奪うシーンが多く見られたが、この 1 試合のみであった。全体を通して、攻守ともに選手の距離感が悪く間延びした試合展開となり、ボールを奪った後のテクニックの質が低く有効的な攻撃にならなかった。

タイ (グループ A : 4 位)

1-4-1-4-1

攻守においてコレクティブなサッカーを指向する傾向が見られた。チームとしてパスをつなぐ意志を感じるが、意図的なビルドアップから前向きにボールを運ぶことができず、特に北朝鮮や中国の速いプレッシャーの状況下では判断なく蹴ってしまい、簡単にボールを失うことが多かった。また、ディフェンスゾーンでプレーする時間帯が多く、ボールを奪って攻撃に切り替わったときに関われる選手が少なく、距離も遠いため、DF が孤立する場面が多くみられた。守備においては、センターバックを中心に組織的に守ろうとするが、コレクティブな意図的な連動はなく、個で局面を対応することが多かった。現段階では個のテクニック不足が顕著であり、攻守における個人戦術の理解を深めることも課題ではあるが、チームとして闘う意識は非常に高く、全員が献身的に球際で粘り強く対応していた。継続して取り組むことで今後の進化が感じられるチームであった。

オーストラリア (グループ B : 2 位)

1-4-3-3

ボールを保持したら、前線にロングボールを供給する縦に速いスタイル。積極的に GK が関わりながらビルドアップする時間帯もあるが、相手プレスに立ち位置も定まらず縦 1 本の単調な攻撃が目立つ。前線から激しくプレスを掛けるものの、組織的に守るより個で対応している印象が強かった。GK はキックの精度は低かったもののポジショニングが良く、キャッチングも力強い。ハイボールも安定しており、1 対 1 のピンチを何度も防いでいた。コンパクトでは無く間延びしている状態ではあるが、局面での粘り強い守備は特長的だった。

韓国 (グループ B : 3 位)

1-4-4-2

前大会 3 位であった韓国が、今大会は FIFA U-20 Women's World Cup 2018 フランス大会の出場権を得られず予選リーグで敗退した。予選リーグ 3 試合を通し、攻守において選手の距離感を保ちコンパクトな陣形を形成し、特に守備では囲い込んでボールを奪うシーンや球際の粘り強さ、相手のロングフィードへの対応に力強さがあった。攻撃においてはボランチやサイドが関わることもあったが、DF ラインから相手 DF ライン背後や FW へのロングフィードが主であり、意図的に関わりながら崩すことはあまりなく、ペナルティエリア内に進入してもテクニックの質が低くボールを失い、決定機を逃すシーンが多く見られた。但し、グループリーグ 3 戦目の日本戦では今までの 2 試合とは闘い方を変更し、攻撃では細かいパスでポジションし、守備では自陣低い位置にブロックを作り日本の攻撃を迎え撃つ形を取った。

ベトナム (グループ B : 4 位)

1-4-1-4-1

攻撃時はワントップの⑩TUYET NGAN を起点にサイド攻撃を仕掛けようとするが、⑩が前線で孤立している為攻撃に厚みが無く、単発なロングフィードだけが目立った。守備に入った時は⑩以外

が帰陣し、ペナルティエリア付近のスペースを人数掛けて守るが、1st ディフェンダーが曖昧な為、フリーな状態でシュートを打たれてしまう。また、不用意なオフサイドトラップを掛けるなど、単純なロングボールに対応出来ずピンチを招く事も多々あった。全体的に、DFラインの押し上げがなく終始間延びしている。

➤日本の闘い

◎システムと闘い方

基本システムは全試合 1-4-4-2。チーム全体をコンパクトに保ち、90 分間全員がコレクティブにハードワークし、攻守において関わりの意識を高く持ち連動して動く。攻撃面においては、GKを含めた安定したビルドアップから攻撃を構築し、アタッキングサードでは意図的な関わりから崩す場面が見られた。ペナルティエリア付近では個での積極的な仕掛けから決定機を作り、ペナルティ内に進入する回数も数多く見られた。守備面では意図的にボールを奪う意識がチーム全体に浸透しており、局面での粘り強い守備も見られ、厚みのある守備が厚みのある攻撃に繋がっていた。

◎攻撃

GKを含めた安定したビルドアップから、優先順位を意識したコレクティブな攻撃が全試合で見られた。チームの中心選手である中盤の⑩長野が、ディフェンスラインとフォワードとのバランスを保ち、ディフェンスラインからボールを引き出し、トップの選手との連携で相手守備陣形を意図的に崩す場面が数多く見られた。サイドからも、⑤牛島や③高平を中心とした両サイドバックのオーバーラップや、⑨宮澤の仕掛けなど、多彩な仕掛けで相手陣地の深い位置まで進入し、効果的なクロスやシュートに結び付けていた。トップの⑱植木や⑪宝田を中心としたフォワード陣のパフォーマンスも非常に高く、前線で攻撃の起点となり、相手ディフェンダーを意図的に集結させ、後方からサポートに加わった選手との連携で厚みのある攻撃で相手守備陣形を崩していた。また、ペナルティエリア内での個の仕掛けも迫力があり、相手ディフェンダーと対峙した場面では積極的に仕掛け、多くの得点に結びついた。2 トップの連携も良く、強固な守備組織を構築しているディフェンスラインを意図的に崩し、空いたスペースを活用し、フィニッシュまで繋げる場面も多く見られた。

◎切り替え(攻撃→守備)

厚みのある攻撃が厚みのある守備に繋がっており、ボールを奪われた瞬間に、相手ボールホルダーに一番近い選手がアプローチを掛ける判断は非常に速かった。また、1st ディフェンダーが決定した後の周りの選手の囲い込みも速く、相手に自由を与えなかった。チーム全体の守備意識が高く、攻撃から守備への切り替えの速さはチーム内で徹底されていた。

◎守備

チーム全員の守備意識が高く、日本の特長であるコレクティブにハードワークする姿勢が全試合で見られた。細かくディフェンスラインを押し上げ、コンパクトフィールドを作る事により選手の距離感が良くなり、複数でボールを奪う場面が数多く見られた。前線の選手が牽制し、後方

の選手がボールを奪うという一連の動きが良く、連結連動した守備が随所に見られた。相手に時間とスペースを与える時間が少なく、ボールを保持されている時間帯でも慌てることなく、冷静に対応していた。ゴールキーパーについては、①鈴木、⑱スタンボー、㉑福田の3名が出場したが、ゲーム毎にゴールキーパーが変わってもフィールドプレイヤーに対する影響は無く、攻守にわたる堅守で安定感のあるプレーで勝利に貢献した。また、後方からの的確なコーチングで、ピンチを未然に防ぎチームを支えた。

◎切り替え(守備→攻撃)

守備から攻撃に対しての切り替えの速さもチーム内で意識が統一されており、ボールを奪った瞬間に相手よりも速く切り替え、効果的なファストブレイクに繋げていた。今大会は、全試合で攻守において主導権を握れたが、グループステージのオーストラリア戦では、前線から激しくプレッシャーを掛けられ、前半は思うような試合展開では無かった。しかし、相手のプレッシャーの速さに慣れた後半からは切り替えの速さで先手を取り、多くの得点チャンスを作ることが出来た。

◎ゲームの出場機会

今大会、日本は5ゲーム闘ったが、全ての試合でスターティングメンバーを変更した。そのうち5ゲーム先発出場したのは⑩長野(先発5ゲーム)だけであった。4ゲーム出場したのは、⑲植木(先発3ゲーム)、⑪宝田(先発3ゲーム)、⑭村岡(先発1ゲーム)、⑤牛島(先発4ゲーム)、⑬宮川(先発3ゲーム)の5名、3ゲーム出場したのは9名、2ゲーム出場したのは7名であり、1ゲームしか出場していない選手はいなかった。270分から359分出場した選手は9名(5ゲーム出場の長野除く)であった。内、ゴールキーパーは、⑱スタンボーが3ゲーム、①鈴木が2ゲーム、㉑福田が2ゲームであった。ノックアウトステージに進出したチームと比較すると、中国は5ゲーム出場が9名、4ゲーム出場が3名、未出場選手は5名で、270分から359分出場した選手は3名であった。ゴールキーパーは全てのゲームで同じ選手がプレーした。オーストラリアは5ゲーム出場3名、4ゲーム出場が8名、270分から359分出場した選手は8名であった。全ての選手が出場したが、1ゲームのみの出場選手は4名だった。朝鮮民主主義人民共和国は、5ゲーム出場が10名、4ゲーム出場が1名、未出場選手は3名で、270分から359分出場した選手は1名であり、決勝の日本戦以外は11名の選手を固定して臨んだ。これらのデータから、日本は登録選手全員に出場機会を与えた事によって、チームの総合力を高めることが出来たと言える。アジア予選というレベルの高い国際大会で全ての選手にゲーム経験をさせた事は、選手の成長を考えると大変意味深い事である。

【グループステージの闘い】

第1戦 vs ベトナム

立ち上がりからゲームを支配し、ベトナムゴールを攻め立てる。3分、㉓佐藤が相手DFとゴールキーパーの間に低いクロスを送ると、㉒遠藤がゴールに流し込み早い時間で先制点を挙げる。30分には、②小野がCKからの流れでゴールを決めると、続く32分にはニアサイドに入った⑲植木が体制を崩しながらシュート、3-0として前半を折り返す。後半に入っても、日本は攻撃の手を

緩めず、53分、⑪宝田がCKのこぼれ球を押し込み、4-0とする。57分には、左サイドの③高平のスルーパスに②遠藤が反応。ゴール前に低いクロスを流し込むと、③佐藤が流し込み5-0とする。その後もゲームを優位に進め、59分、67分と⑪宝田が再び得点を決め、ハットトリックを達成。73分には、左サイドの②遠藤のクロスに③佐藤が合わせゴールし、8-0として初戦を白星で飾った。

第2戦 vs オーストラリア

オーストラリアは、立ち上がりからスピードを活かした攻撃を展開し、日本ゴールを攻め立てる。13分に、自陣でボールを失うとそのままドリブルで持ち込まれ、先制点を許す。30分が経過する頃から、ようやく相手のスピードにも慣れ攻撃する時間も増えたものの、0-1で前半を折り返す。後半に入り51分、右で得たスローインから⑭植木がドリブルで持ち込みシュート。こぼれ球を拾った⑬宮川のシュートが決まり、1-1の同点に追いつく。攻撃の手を緩めない日本は58分、⑬宮川からパスを受けた⑭植木がゴール前で溜めると、⑦林のミドルシュートがゴールに突き刺さり2-1と逆転。その後66分に⑨宮澤が、72分と90+3分に途中交代で入った⑪宝田が追加点を決め、5-1でゲームは終了。

第3戦 vs 韓国

お互いグループステージ突破をかけた闘いとなったこの試合。25分、③高平のスローインから⑩長野へボールが渡り、⑭村岡へとパスを繋げようとするが得点には至らず。前半は、韓国の固い守備をなかなか崩すことが出来ず0-0で折り返す。後半に入り49分、③佐藤からパスを受けた⑭村岡がゴール前で体を反転させながら得点。その後も攻撃の手を緩めず、81分、⑧福田がペナルティエリア外で相手選手に倒されFKを得る。途中交代で入った⑳菅野が蹴ったボールは、ゴールポストの内側にあたりゴールへと吸い込まれ、2-0とリードを広げる。ゲームはこのまま2-0で終了。日本はグループBを首位で通過し、準決勝へと駒を進めた。

【ノックアウトステージの闘い】

準決勝 vs 中国

序盤は中国の勢いに押され、日本は我慢の時間帯が続く。27分、日本は中盤で細かくパスを繋ぎながらゴール前にボールを運び、左サイドの⑰北村がクロスを上げたが、相手ゴールキーパーに阻まれる。33分、相手の右サイドからのクロスがそのままゴールラインを割りそうになるが、ギリギリのところで、⑤牛島がクリアー。ゴールキーパーの⑱スタンボーを中心にDF陣が体を張ってゴールを守る。0-0で迎えた後半、ゲームは一気に日本のペースになる。47分、⑪宝田のスルーパスに⑨宮澤が反応。相手ゴールキーパーと1対1になったところを冷静にゴール右隅に流し込み、日本は先制点を奪う。直後の48分に再び⑨宮澤が追加点を挙げて2-0とすると、61分には、左サイドをドリブルで突破した⑭植木がゴール前に低いクロスを送り、これが相手のオウンゴールを誘い、3-0と突き放す。その後も、攻撃の手を緩めない日本は、64分に⑭植木、85分に途中交代で入った⑮目原が追加点を挙げ5-0でゲームを終えた。この結果、日本はFIFA U-20 Women's World Cup2018 フランス大会の出場権を獲得することが出来た。

決勝 vs 朝鮮民主主義人民共和国

2015年の前回大会と同じ対戦カードとなった決勝戦。ゲームは序盤から一進一退の攻防が続く。25分、⑦林が中盤で相手ボールを奪い、ドリブルで持ち込みシュートを打つが惜しくもゴールを外す。42分、⑩長野から⑬宮川へとボールをつなぎ、最後は⑱植木がゴール前にドリブルで侵入しシュートを放つが、相手ゴールキーパーに阻まれ前半を0-0で折り返す。50分、CKの流れから、⑱植木がこぼれ球をシュートし、サイドネットに突き刺さる先制点を奪った。64分、⑩長野からのパスを受け、⑦林が放ったシュートはバーにあたり、惜しくも追加点はならず。守備では、起点となっていた朝鮮民主主義人民共和国の⑦SUNG HYANG SIMへ、徹底的にマークし攻撃の芽を摘んだ。ゲーム終了間際、相手のCKが続く、日本は我慢の時間が続くが、ゴールキーパーの①鈴木を中心に守備陣が猛攻を耐え1-0でゲームは終了。本大会5度目の優勝を飾った。日本は、上位3チームに与えられるFIFA U-20 Women's World Cup2018 フランス大会の出場権を獲得するとともに、今大会でフェアプレー賞を受賞した。

【日本の特長と課題】

1) 特長

① 組織的な守備

全てのゲームにおいて、攻守の切り替えの速さが際立っていた。ボールを保持する時間帯が長いゲームが多かった事もあるが、攻撃から守備への切り替えが特に速く、相手に自由を与える時間が少なかった。守備においては、個人としての役割をやり切る責任感が非常に強く、また最終ラインの押し上げも速い事から、終始コンパクトで組織的な守備陣形を形成することが出来、チーム全体で意図的にボールを奪う意識も高かった。

② テクニックの高さを活かした GK を含めた正確なビルドアップ

GKの攻撃に関わる意識が高く、ディフェンス陣を含めた後方からのビルドアップが非常に安定していた。テクニックの高さを活かした正確なビルドアップは、日本が目指すサッカーの生命線となる部分であり、全てのゲームで主導権を握る闘いが出来たベースとなった。特に、②小野、③高平のグランダーの強くて速い縦パスはこの年代では質が高く、日本の攻撃のスイッチとして大きな役割を担っていた。

③ 意図的な崩し

攻守においてコレクティブであり、選手の距離感も良く、連動した関わりを持ち、アタッキングサードの意図のある崩しが全てのゲームで見ることが出来たが、これは他国には見られない日本の特長である。日本には選手が連動した「崩しのイメージ」と「テクニック」がある。だからこそ、更に関わりの質を向上し選択肢を増やしていきたい。特に、⑱植木のペナルティエリア付近でのドリブル突破や味方選手との連携からの崩しは、相手にとって脅威な武器となった。

④ フェア、直向き、冷静

日本はピッチ上において、フェアで直向きの姿勢で闘っており、日本のサポーターからは安心と誇りもたれ、日本のサポーター以外の観客からは好感をもたれ、応援をしてもらえる存在であ

った。また、劣勢な状況でも選手は常に冷静であり、押し込まれても失点しても淡々と闘う姿勢は称賛された。また、先制点を奪われても、膠着した時間帯でもチームが崩れず、闘い方が変わらなかった。これは、テクニックの裏付けが有る事やこれまでの経験値が高く、自分たちのチームに自信を与えた事が要因であると考えられる。

2) 課題

① テクニックの追求

強烈なプレッシャーを受けても安定したポジションができるまでのテクニックの習得が必要であり、相手を完全に上回るだけのテクニックの質の追求が求められる。対戦相手は日本には必ず強いプレッシャーをかけてくる事が予想される。今大会のオーストラリアの前半の前線からの「猛プレッシャー」に対して、状況に応じたシンプルな闘い方を選択することも必要となる。また、強烈なプレッシャーを受けないためにも、動きながらのテクニックや、パス&サポートの質を更に向上させなければならない。その為には、日常において、必要性を理解させたうえで、シンプルで単純なトレーニングも必要である。更には、シュートやドリブルの質も向上させたい。単純なサイドからのクロスや強引なシュート、ミドルシュート、強引なドリブル突破も時には必要である。

② クロスの質

意図的に攻撃し、相手陣地の両サイドを効果的に攻める頻度が高かったが、クロスの精度が低く、ゴールに結びつくシーンが少なかった。加えて、クロスに合わせる中の選手の質を向上すれば、更に得点の可能性を高める事が出来る。この事は、日常のクロスのトレーニング不足が大きな要因であると考えられる。

③ コンタクトスキルの習得

テクニックとして身体を当てるプレーを習得させ、激しい当たり（コンタクト）にもぶれない身体を作っていかなければならない。今大会においても、体格差がある選手に対して当たり負けする場面が多く見られ、DF を背負った時や、相手と並走しながらのプレー時に顕著にみられた。

④ 無理な体勢からのテクニックの発揮

チーム全体のテクニックの質は向上してきているが、体勢が崩れながらも正確にプレーできるテクニックが不足している。例えば、全力で走りながら逆ポストを狙うシュートや、マイナスにあげるクロス、または下がりながらのヘディング、クリアーなどが挙げられる。日常のトレーニングにおいて、無理の利く身体づくりや体幹の強化を図る必要がある。

⑤ 個の守備能力の向上

様々な局面で、1対1でボールを奪える能力に欠ける場面が見られた。日常から、個の守備能力を向上させるトレーニングが重要となり、ドジリング等で相手と対峙した時の対応を習得し、身体を入れて奪う事や、身体を寄せて奪う事を体得させ、後向きの選手に対しての適格な対応も習得していかなければならない。強い個をもって意図的（積極的）にボールを奪う守備が出来るよ

うになれば、グループでもボールを意図的に奪え、相手の守備陣形が整う前に攻撃に転じる事が可能となる。また、ヘディングの技術が不足しており、相手から供給される前方から来るボールに対してクリアーが出来ない時や、相手に競り負ける場面が散見された。

⑥ ゲームで相手を圧倒する運動量（相手が嫌になるほど攻守に走る）＝強烈なハードワーク

日本は、今大会参加したチームと比較し、豊富な運動量で攻守にハードワークしたが、更に相手を圧倒するゲーム内容を求め、持久力やダッシュの回数、ロングダッシュ等の質と量を向上し、攻守において選手が湧いて出てくるような闘い方ができるまでの持久力の習得を求めたい。あくまでもデータ上の優位差ではなく、サッカーのゲームで発揮できる持久力であり、同時に精神面も含めて向上させたい。選手には、「おとり」になる動きなど、一見無駄と見える動き「無駄走り」の重要性を理解させることも重要である。更に、攻守の原則などの戦術的理解も高め、賢い闘いができることも必要である。

⑦ 優先順位の理解

シューティングエリアでの強引にでもシュートを打つプレーなど、アタッキングサードでのゴールへの食欲さが欠如している。ゴールへの執念を更に高く持ち、時には土臭さも必要である。また、パスや動きなどの攻撃の優先順位を徹底させ、判断無く簡単にボールを下げない事を徹底させる必要がある。但し、ポゼッションの意識は失う事はせず、食欲にシュートを狙うのか、ボールを失わずに前へのプレーを選択するのかの判断は大事にしなければならない。

⑧ ゲームを読む力

今大会、ゲームの入りが悪く、前半はチャンスを得点に結び付けることが比較的少なかった。前半から本来の力を発揮する事が出来ていれば、更に相手を翻弄する事が出来たであろう。このことから、ゲームでのパフォーマンス発揮の向上だけでは無く、相手チームの闘い方を読む能力も身に付けたい。相手の闘いの意図や狙いを読み、どの様に相手の弱点を見抜いてそこを突くのか。

また、相手が何をしてくるか、相手は日本に何をさせたくないかを分析し、相手の嫌なことをチームとして実行する事が今後求められる。スコアや試合の状況（時間帯や得点差、勝ち点等）によって自分達の闘い方を崩して臨んでくるチームに対しての闘い方も徹底したい。

▶ベンチマークプレイヤー

・JADA MATHYSSEN（オーストラリア①）

ポジションはGK。ハイボールに強く、シュートストップも安定しており守備能力が非常に高い。ビルドアップ時はポジションを高く取り積極的に攻撃参加する。

・ELLIE CARPENTER（オーストラリア②）

ポジションはDF。足が速く1対1に自信を持っているセンターバック。小柄だが球際も強く、局面での守備には迫力が有る。リーダーシップも取れ、ディフェンスラインをコントロールする。A代表での出場経験もある

・長野 風花（日本⑩）

ポジションはMF。運動量が豊富でテクニックと判断力にすぐれるボランチ。ビルドアップ時も攻撃の基点となり、チームの中心的存在である。今大会、唯一全試合に先発出場した。2016年 FIFA U-17 Women's World Cup パプアニューギニア大会の MVP。

・JU HYO SIM（朝鮮民主主義人民共和国⑬）

ポジションはMF。パスとコントロールが安定しておりミスが少ないボランチ。サイドチェンジのパスの精度が高く、ワンステップで逆サイドに展開できる能力がある。

・植木 理子（日本⑱）

ポジションはFW。得点力と突破力を兼ね備えたストライカー。前線で攻撃の起点となり多くのチャンスを作った。チームが劣勢の状況では積極的に得点に関わり、勝利に大きく貢献した。

・SUNG HYANG SIM（朝鮮民主主義人民共和国⑦）

ポジションはFW。今大会の得点王であり MVP も獲得した。もう一人のFW⑩Kim RYU SONG が後方からのボールを引き出してできたスペースに判断良く走り込みチャンスメイクする。ヘディングやキックの能力にも優れ、得点力がある。スピードが有り運動量も豊富で基本技術が高い。

➤セットプレー

今大会の総得点 63 得点のうち、セットプレーによる得点は 8 点であった。直接フリーキックによる得点が 2 点、コーナーキックによる得点が 3 点、ペナルティーキックによる得点が 3 点であった。各国ともゴール前での直接フリーキックやコーナーキックへの守備の対策がなされており、GK のセービング技術の向上だけでなく、フィールドプレイヤーのヘディング技術や戦術理解度も高く、簡単にゴールを奪われる場面は少なかった。守備では多くの国がゾーンディフェンスとマンマークを併用した形で対応していた。攻撃では、日本の⑳菅野奏音や韓国の⑧PARK SEONGRAN など、ミドルゾーンからの直接フリーキックでもシュートを打つ選手が多かったことが特長として挙げられる。この年代ではフィジカル面で筋力が向上するのに伴い、ロングキックが安定し、キックの質も高くなる事から、得点する確率が向上してくる。また、今大会にて日本はセットプレーからのゴールへの仕掛けが多様であり、様々な工夫とアイデアを持ち、高いテクニックを発揮するとともに相手の状況を観ながら判断してプレーをしていた。守備においては、2011年 FIFA Women's World Cup ドイツ大会に続き、国際大会でのセットプレーからの失点が無かったことは特筆に値する。

➤ゴールキーパー

女子サッカーも含め、世界のトップレベルのサッカーが「テクニカルに、スピーディーに、コレクティブに、そしてタフに」なり、GK の役割も多様化し求められるものも増えてきている。今大会でもその傾向はみられ、アジアの中でも格差はみられるが、この年代のトップレベルの GK を見てみると、安定した GK の存在がチームの勝利に貢献していた。

【ブレイクアウェイ】

守備範囲の拡大という点では、コンパクトフィールドを形成し、守備組織を形成していく中でDFライン背後にできたスペースをケアするGKが増えてきている。その中で、狙いを持ち、ペナルティーエリアの外のエリアを足や頭でプレーするシーンもみられ、アジアの中でも守備範囲の拡大はみられる傾向にあった。また、相手シューターとの間合いを詰めて、シュートコースを狭めて、身体全体を使い身体を面にしてブロックするシーンもみられ、ボールを奪うだけでなく、相手選手にプレッシャーをかけながら、ブロックする技術や判断、プレーの選択、決断するプレーもみられた。混戦状況下での判断の質という部分では世界との差がみられた。

【クロス】

単純なクロスに関しては、各国のGKは狙いをもってプレーしていた。ボール状況に応じてポジショニングをとり、積極的にボールを奪いにいていた。その中で、GKがボールを奪うと判断し出てきた際には味方選手と連携し、相手選手をプロテクションしたり、ゴールカバーに入ったりとチームとしてグループとして連携してクロスを奪うシーンがみられた。この年代でフィジカルコンタクトが激しくなってくる中で味方選手との連携は必要不可欠となってきた。その中で、日本のGKは混戦状況下や掴めないボールに対して、「弾く」というパンチングやディフレクティングの技術の飛距離や弾くエリアなど技術の不安定さがみられ、クロスにおける世界との差がみられた。

【シュートストップ】

シュートに対して「良い準備」をする中で、日本のGKは安定したゴールキーピングやゴールを守るという点において堅実なプレーがみられた。特に身体近くのボールに対しては、安定したキャッチングやローリングダウンなどみられ、ゴールを守っていた。その中で、守備範囲という点では、身体をスムーズに動かしながらより遠くにダイビングする、弾くといったディフレクティングを用いて、厳しいコースに打たれたシュートに対して対応するといった点においては、世界との差としてみられた。

【ディストリビューション、パス&サポート】

攻撃に関わる部分では、各国がGKも含めて攻撃を組み立てていく傾向にあり、GKも積極的に関わり、11人のうちの1人のプレーヤーとして攻撃に関わっていた。攻撃参加データから見ても味方選手からパスを受ける本数も多く、短いパスの成功率も高い数値となっている。その中で、日本のGKは、長いパスの成功率や効果的なパスという部分では、攻撃参加データやプレーをみても、低い数値となっている。また、パスの質や、精度、正確性という部分やチームの攻撃に効果的に関わる為の配球といった点では世界との差としてみられた。

【GK 育成への示唆】

今大会、日本は、5ゲームを闘い、1失点と最小失点でおさえたことは、チームの勝利、そして優勝に大きく貢献したといえる。また、登録した3名のGK選手がピッチに立ちゲームに出場しワ

ワールドカップのかかったアジア予選という国際ゲームを経験できたことも今後につながるものとなった。最少失点でおさえたい要因としては、GKだけでなく11人全員でゴールを守るという意識が高く、GKが味方選手とコミュニケーションをとり連携し守備組織を構築した成果といえる。そして、守備だけでなく、攻撃にもGKが積極的に関わり、攻守におけるコレクティブな部分で日本の良さとして他国との違いがみられた。また、国際大会でセットプレーからの失点がなかったことも大きな成果である。長身選手やフィジカルが勝る相手に対して、GKを中心にオーガナイズし、11人の選手それぞれが、セットプレーにおける役割を理解して、実行した結果といえる。

今大会を通して、世界やアジアで闘ううえで『良い準備の徹底』は必要不可欠であると改めて感じた。どのプレーにおいても「状況把握、予測、決断、実行」というサイクルがあるが、特に「観る・状況把握⇒予測・決断」のスピードを高めていかななくてはならない。世界で闘う中で、チームの勝利に繋げる為にも、必要となってくる部分である。

今後も日本の良さでもある「攻守への関わり」を継続して取り組み、「良い準備」「基本技術の徹底」とともに、質の部分に追求しながら、育成年代で取り組んでいかななくてはならない。

➤日本の育成への示唆

今回、日本は2大会連続5回目の優勝を収め、準優勝の北朝鮮とともにこの年代における世界のトップレベルのサッカーを展開し、多くの称賛を受けた。日本の卓越した技術力、戦術力はもとより、全員がコレクティブにハードワークし、攻守において関わり意識を高く持ち連動する組織力は、まさにJapan's wayを具現化したものであるといえる。チームとして意図的な戦術行動を実践することが求められ、大人のサッカーへ移行するこの年代では、育成年代で培ってきたテクニックや個人戦術をベースに、チームにおける個人の役割を理解することがとても重要となる。今後より高いレベルを目指して進化していくためには、育成年代でいかにその質にこだわり、ベースを底上げできるかが、日本が「世界のなでしこで在るため」の大きなカギとなるといえる。

① 動きながらのテクニック（技術・判断）

1) プレッシャー下でのテクニック

日本の安定した足元の技術と相手の状況に応じた動きながらのテクニックは、今大会でも高い評価を受けたが、オーストラリア戦のときのような前線から強烈なプレッシャーを受けたときのプレーの精度には課題が残った。世界トップレベルのチームは、テクニックに優れた個が存在するだけでなく、スピーディーかつコレクティブなサッカーをすでに指向し、年々進化している。厳しいプレッシャーがかかる中で、状況に応じたプレーを選択しながら、安定したポジションができるまでのテクニックの習得が必要不可欠である。また、ボールを奪いに来る相手のアプローチを正面から受けないために、視線を変えるための1stコントロールやプレースピードを上げた動きながらのテクニックの正確性を向上させることが重要である。日常のトレーニングからプレーのテンポと強度を高め、より激しくボールを奪い合う中で、ゲームで生きる判断や質を求めていきたい。

2) クロスの質

アタッキングサードでの意図的な崩しは、他国に比べても多くのバリエーションを持ち、複数

の選手が関わりながら連動していたが、さらに攻撃の幅を広げゴール前の強固な守備ブロックを突破するために、サイド攻撃からのクロスの質を追求していきたい。トップスピードに乗った状態でも強い横パスやマイナスのパスを出せるようにすることや、グラウンダーと浮き球を蹴り分けられるようにキックの距離や強さだけでなく、種類も増やしていく必要がある。そのためにファンクショナルトレーニングとして日常のトレーニングに取り入れることも有効であると考えられる。

3) テクニックを活かすフィジカル

世界トップレベルの国と比べると日本の体格はやや劣るかもしれないが、単純な高さやスピードで勝負するのではなく、日本の特長であるテクニックを活かすためのボディコンタクトなど、ボールを扱う中でのコンタクトプレーの質を伸ばすことが重要である。例えば相手のプレッシャーを受けてバランスが悪くなった状況でも正確にプレーすることやボールを奪われないテクニック（ターンやスクリーン）、トップスピードでのシュートやクロス of 正確性にこだわっていく必要がある。また、下がりながらのヘディング、クリアーを前方へ飛ばし、パスにするためのステップワークや身体の使い方、体幹の強化は育成年代からの取り組みが必至である。

② 攻守に関わり続ける個人戦術

1) 攻撃・守備の優先順位の理解

日本のサッカーが目指す Japan's way では、攻守において常に主導権を握り、全員攻撃・全員守備の意識を高く持ちながらコレクティブにハードワークするサッカーを目指している。ピッチにいる選手は常に状況に応じた瞬時の判断を繰り返し、攻守に関わり続けることが求められる。そのために「ゴールを奪う、ゴールを守りボールを奪う」、サッカーの原理原則を理解し、優先順位を意識してプレーすることが大前提となる。今大会においても日本は安定したポゼッションやパスワークで多くのチャンスを作り出していたが、シュートチャンスを狙わずに判断なく後ろにパスを出してしまうプレーやゴールへの突破に消極的な場面が散見された。一瞬のすきを逃さずシュートを打つ、ゴール前での積極的な突破を求めている。また、守備においてはボールを失った際に、攻撃から守備の素早い切り替えを行う中で、ただやみくもに奪いに行くのではなく、味方と相手の状況を認知し奪いに行くのか、遅らせるのか、「いつ」「どこ」でボールを奪うのか、個人としてチームとして判断しながら意図的に奪うことを求めている。

2) ゲームを読む力（認知と予測）

ゲームを通して攻守ともにコレクティブに連動したサッカーは、「日本の闘い」で前述したように日本の特長であり、生命線であるといえる。今後さらに質の高いサッカーを目指すには、テクニックの追求と同時により高い個人戦術が要求される。「状況に応じた判断」をするためには多くの情報を認知する必要があり、プレーの選択肢を多く持つことが適切な判断へとつながっていく。育成年代からその重要性を理解させ、より厳しくプレッシャーをかけ合う環境でのプレーを要求しながら判断スピードの向上も求めている。さらに時間とスペースが限られた現代サッカーにおいては、ボールを持っていないとき、つまりオフザボールのときの動きが非常に重要であり、その関わりが勝負を分ける要因となってくる。ゲームの中でどこにチャンスがあり、またはピン

チが潜んでいるのかを感じ、タイミングよく動き出すことや次のプレーを予測しながら連続してポジションを修正し、効果的にプレーに関わることを求めていく必要がある。日常のトレーニングにおいて我々指導者は、味方と相手の状況を常に観てプレーすることを促し、次に起こりうる状況を予測して考えながらプレーすることを習慣化させることで質の高い個（またはチーム）の育成に取り組んでいかななくてはならない。

③ ハードワーク（運動量・タフさ）

ゲームではチーム全体をコンパクトに保ちながら、攻守において関わり続け、コレクティブに連動・連携・連続したプレーをするために、一人一人のハードワークは不可欠であり、持久的能力が著しく伸びるといわれている育成年代で強化することが非常に重要となる。トレーニングの中で持久力を強化するためには、これまでに述べた個人戦術の積み上げが非常に重要となる。サッカーの原理原則を理解し、動きながらのプレーを習慣化することや味方と相手の状況を観ながらタイミングのよい動き出しでサポートを連続して行うこと、1対1の球際での粘り強い守備や1stディフェンダーのアプローチの状況を観ながら2ndディフェンダーのポジション修正とセカンドアクションなど、個人戦術の習熟と運動量は大きく関係していることを意識してトレーニングに取り組んでいく必要がある。さらに攻守において相手を圧倒するサッカーを展開するために、相手の守備バランスを崩すためのオーバーラップやダイアゴナルランなど、時におとりとなるアクションや関わる人数を増やすことで攻撃の幅を広げ、ゴールへの突破を目指すモビリティやコンビネーションの必要性を理解させることも重要である。

▶トピック

前述した通り、今大会に招集された選手23名の内、11名が2016年のFIFA U-17 Women's World Cup 2016 ヨルダン大会に出場している。また、2014年のFIFA U-17 Women's World Cup 2015 コスタリカ大会にも5名出場している。長野風花は、2014年と2016年の両大会に出場しており、合計15名の選手が過去のFIFA U-17 Women's World Cupに出場している。過去に、JFA エリートプログラムU-13, 14に選出された選手はそれぞれ7名。ナショナルトレセンU-12に選出された選手は9名。ナショナルトレセンU-15に選出された選手は19名。2013年以降、国際大会に初招集された選手は7名であり、育成年代からメンバーを固定して強化している訳では無く、広く選手を視察し選出したこともデータから読み取れる。この事から、日本は計画的、且つ継続的な選手の育成・強化を図り、着実に成果となって現れていることが解る。